白氏長慶集

へ 13
2764

へ13
辨770
巻8

白氣忠義物語

墓誌編輯

歌川貞重

東都
金幸堂板

坪内雄蔵氏寄贈

へ13
2764
へ13
2764

嫉髪蛇物語

繪入讀本 初編五冊

全亭正直 作
溪齋英泉 画

古昔八幡倉二代の将軍頼家卿の往昔なる和田平太胤長が伊東が奇妙なる蛇の恵夫一家に祟り胤長が配所小自報一側女けいそが胤長が妻嬰兒の腹に在ちち暇を賜て在所足柄小世を忍び産ちなる男子を逃れ守りて女子と披露なし行末を待ちかねが残忍無頼小小盗を殺しその讐憤のゆうえんなる蛇を尋ねる孝子の艱苦さ胤長が郎従なる任平侍太父子の忠伝或い熱権が依古の改道終小孝子の徳見はてく歌を討の件まで八繰長けまで表をかえて二編三編もまた刻あり市に鬻も近きふあり

同第二編 全五巻 第三編 全五巻満尾

松亭金水嗣作
溪齋英泉画

いづこ太夫が正本に歴然そして著明きさくも坂田の金ぴらが顔乃色ある赤本の時代小世話を撮合せ彼筥根うら先とい野夫な趣向の化物語へむすーー小異るに戯作の根膽智恵八僅小三文うら稍一條小綴る九六の百鬼夜行とう入ひごあるものへなと人のいひけん人お為心の鬼をそのほ小繪師小寫さを詞小述へ嗚呼ぐまーくもりまーそのそもそるれやあろごね前の杖ととなやそ色竹の世渡屋長者が故事を磨るぬせーあぐの燈燭夜の錦の秋ゆそで丁子頭も實を結ぶ宝玉

この花の春おふとぬ序まるをいか。

天保十五年甲辰正月發行

曲亭馬琴識

物の怪を
つひふせ
まけん
はまちの男が
右仏法
義は
ちのう
世渡屋の手代
白鼠の信七
世渡屋の
手代双六

世渡屋
の手代
盤九郎

世渡屋の重宝
黄金牝鶏

人乃みや
乃
ちゝ

世渡屋の
重宝
黄金の牡鶏

世渡屋重宝徽宗皇帝の鷹の一軸

管領家の重役
楢阪侍右衛門
管領家の目代
卯坂宇東次
管領家の御落胤
粧姫

ちんしち

白鼠忠義物語

曲亭馬琴作
歌川貞重画

金幸堂上梓

初心初學抄

蓮池堂先生書　全一冊

雅俗ノ用ヒル書籍ノ文章。美　児童ノ春ノ始メ学ビ
詩歌ノ書法ヤ七夕小屏ノ人倫ノ侍ル。詩傳ニ入レタルヲ、朗詠
及ビ代々ノ歌集ノ外ニ出ヨリ採リ出シ。未ダ女用ノ古ノ文ヲ
その書法と審ラ比ベ。東妙子の揮毫ナレバ物ヲ学ビの雅児童
ノ右ヲ並テ並ベ。挿ヲ彫ル物ヲ。孫因子と差ふこと

蓮池堂いろは帖

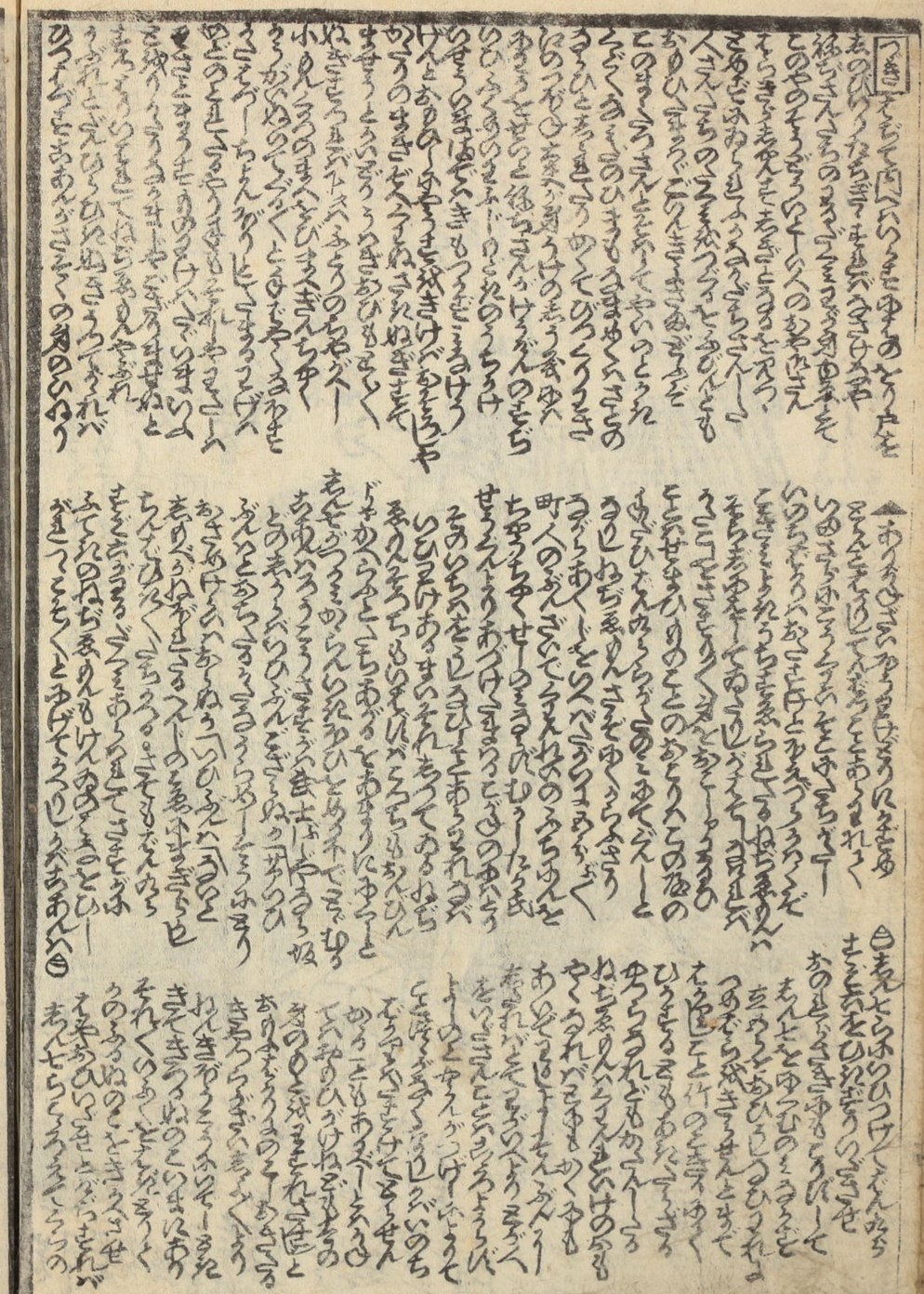
折手本形一冊

いろはの文字四十七を。辨ヲ書ヲ初テ幼稚人の手本とする。ふと童
蒙ノ物ノ為シ。出レバ童ヲ人ニ教テ学ビの為ノ

とあん

とあん
とあん

つき
きん七
ちんぺら
ぺす



ねぢまろ

まんが

ねぢ兵衛

光悦正流盆画 獨稽古

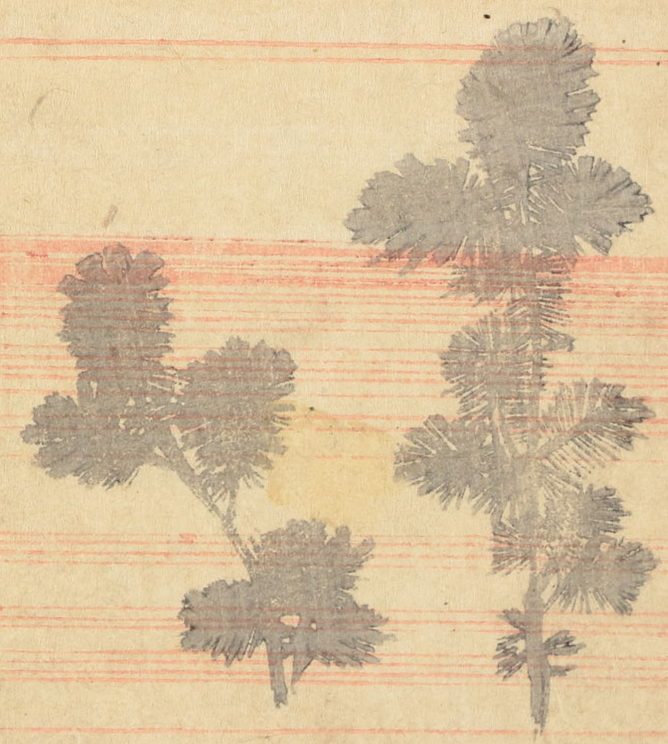
全一冊

大の獨稽古々元来流儀うつぬ所為るのまば公達
姫君を慰めまゐらせ侍さいわゆやう物義をあらふまゐ最
上品の慰なり殊さ一枚の画成るて物を絵具さ用ゆまば
紙筆の費もなく色画なりゆあ色画紙のおの即
ちなり君紙なぐさ先分を蔵ゆ益の多分の事有
あり仕書をもて学びゆへば師匠求むるゆ及ばず

白嵐無義物語

由亭馬琴作
歌川貞重画

馬喰町四丁目
菊幸板



遠州流挿花意匠

全三冊

世年 挿花の事年 とくどくと師匠を
ふくせびさの書く流義の中ふしも別く花形の
出来ふつゝき易く挿くて考へるとび初心いつめて
業流を学ぶの看に義あるの美外類のごとく
挿花の意匠を作る匠の丹誠教導ことを過ふる年
を挿花牡丹桂の中の一大絵書あり

つぎ
おけさ

むかしあるのあんひを
手紙

十の

おけさ
きまた

前

清涼香

あせぶの妙薬

一包代七十二銅

此清涼香は世の暑さ寄せ来る時一夏の日に湯上りの後ひたぶるつけまくるとこゝろ汗をかかず一はけ二はけ三四はけ中極方無日にまれにいつとても汗の出ずるの影もなくいつけるかぐのみせ紙にさげ風をしたゝめ高貴の御前へ出るかゝる又は五月雨の時分蒸へ乳鉢等の事に和合せし大変薬なり然れ一汗ばとあれば直ちに振りかけ出る汗の名臭をさらり悪る汗さえとゝまり常に用ひて白粉袋の替りとなる霊験の妙なり

江戸貴弘所　浅草広小路馬喰町四丁目はぜ屋

菊屋孝三郎

白